【129】

氏名	田中正男（たなかまさお）
学位の種類	医学博士
学位記番号	論医博第74号
学位授与の日付	昭和38年3月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**歯石の臨床病理学的研究** **とくにその沈着状況と歯槽膿漏症との関連について**
論文調査委員	（主査）教授 鈴江 懐　教授 美濃口 玄　教授 岡本耕造

論文内容の要旨

本題の研究に着手した当初の意図と，研究成果を総括した要旨は次のとおりである。

従来，歯槽膿漏症の治療にあたり，処置の1要素として，歯石除去をその有効である理由が奈辺にあるかはさておき必ず励行するよう推奨されている。著者はこの慎重な除石操作によって，歯肉縁上歯石（唾石）と歯肉縁下歯石（血石）そのものを取り去ること自体が唯一の理由でなく，むしろ盲嚢内の膿汁を始め，諸種の微生物，ないし外来性異物が清掃される点が奏効したと考える。

また人呼んで盲嚢壁に成り立っている肉芽組織を不良肉芽ととなえ，歯肉縁内側上皮，盲嚢上皮ないし上皮付着部を目指してこれを除去することが通念のようである。しかし膿漏病巣一帯には多種多様の微生物が棲息して常に脅威を受け，なお機会だにあれば，猛威をふるうべく待機しているから，これに対応して防衛の意味で上記の肉芽組織が装備され，さらに盲嚢の入口から口腔粘膜の上皮が増殖して嚢上皮に発展し，肉芽の表面を被覆保護し消炎に努めているのであるから，この点についても認識を新たにすることが必要である。しからば，さまでに重要な歯石除去は容易なものか，困難か，それとも不可能事であるかが一つの問題点となって来る。著者はその根底をなすものは歯肉縁上歯石（唾石）と歯肉縁下歯石(血石)などの沈着が歯のいずれの部位に始まるか，それが以後いかように発展するかを明確にしておくことであると思う。

著者は国立篠山病院，歯科外来患者について歯石沈着歯の臨床的観察を行い，さらに大阪歯科大学口腔病理学教室所蔵の歯石沈着歯について調査をし，その目的遂行に努めた結果，とくに口腔内における酸塩基平衡の乱れと歯の抵抗力の差によって，歯石の沈着と齲蝕の成立が括抗し，また膿漏歯にして両者を兼ねるものがしばしばあることと牙質感覚過敏，ないし歯髄炎性歯痛の由来を解明するのに役立つ成果を収めることができた。幸い大方の臨床歯科医家が参考にして除石操作に一層精進されたら，従前ややもすれば暗中模索のために不成功であった面目を改め得るものと思う。

論文審査の結果の要旨

歯石と歯槽膿漏症との関係については約400年の昔，すでに論ぜられている。そうして現在の歯科医学において，もっとも難治性疾患とみなされているのが，この歯槽膿漏症であり，しかもその本態については今なお模糊とした状況に置かれ，ことにその疾病発生原因に至っては内因説あり外因説あり，全身説あり，局所説あり，ほとんど収拾のつかぬところのものがあるが，いずれにせよ歯石となんらかの関係を持つことは，多くの人の認めるところである。事実厚生省の中央社会保険医療協議会でも，歯槽膿漏症の治療指針として，各種療法のうちでも歯石除去の重要性がかならず強調されている。しかし，この歯石除去が果して抜本的な意義を持ち，歯槽膿漏症の原因が歯石であるかどうかということには多くの疑義があり，それの決定にはなお，歯石そのものの本質を究明しなければならない。そこで著者は歯石沈着歯保有患者680名につき臨床的観察をとげ，さらに抜去歯につき歯石沈着歯1469例の病理学的検索を行なったのである。

まず歯肉縁上歯石（唾石）については，その沈着状況，性別，年代別，部位別，形態，咬合面沈着状況，色調などの検索を行ない，つぎに歯肉縁下歯石（血石）については，各歯面の沈着状況，その性別，部位別，形態，色調ないし表面性状などについて論考し，なお，歯石沈着と齲蝕との関係などについて精検したのである。その結果，歯石沈着，歯牙齲蝕症，歯槽膿漏症などにつき新らしい事実を知り，それらの治療ないし予防に寄与するところのものを見出した。

以上のごとくにして，本研究は現在歯科学上もっとも問題点の多い歯槽膿漏症との関連において，歯石の臨床病理学的研究をとげ，新らしい一つの指針を示したもので学術的に価値があり，医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。